

# 島根県雲南市の SATYOAMAツーリズムと インバウンド増加の効果を 可視化したインパクトモデル

ローカルベンチャー協議会レポート  
2025.3



島根県雲南市は、2016年のローカルベンチャー協議会発足時から幹事自治体として参画しています。住民自らが主体となって地域づくりを行う「地域自主組織」で知られ、若者・大人・子ども、全世代の住民が地域づくりにチャレンジできる環境を整えていることから、注目を集めてきました。ローカルベンチャー推進事業への参画を通じては、若者を対象とする次世代育成事業に注力してきたほか、企業との連携も積極的に進めています。

この次世代育成事業がベースとなり、雲南市の起業家（ローカルベンチャー）同士がつながり学び合うコミュニティとして、2021年に誕生したのが「Seedラボ」という場です。そのテーマの一つが森林の観光資源としての利活用を考える「森あそびラボ」。そこから発展して2023年に開始した「SATOYAMAツーリズム」では、インバウンド観光や観光入込み客数の増加に向けた戦略的な取り組みを行っています。観光というツールを活用し、最終的には雲南市が掲げる「市民一人ひとりのwell-beingの実現」を目指しています。

本レポートは、ローカルベンチャー協議会として、雲南市の重要施策の1つであるこのSATOYAMAツーリズムを取り上げ、中でもインバウンド観光客の増加が中長期的に地域にどのようなインパクトをもたらすかを可視化した「インパクトモデル」を作成し、考察を行ったものです。

## 目次

1. はじめに	4
1.1 ローカルベンチャー協議会とは	
1.2 ローカルベンチャー支援の取り組み	
1.3 このレポートについて	
2. 雲南市について	7
2.1 雲南市の概要とこれまで	
2.2 今後目指す姿	
3. SATOYAMAツーリズムとは	11
3.1 SATOYAMAツーリズム立ち上げの経緯	
3.2 SATOYAMAツーリズムが目指す姿	
3.3 SATOYAMAツーリズムの取り組み	
4. SATOYAMAツーリズムにおけるインパクトモデル	16

## 1. はじめに

### 1.1 ローカルベンチャー協議会とは

ローカルベンチャー協議会は、主に地方において地域社会の資源を活用して起業したり新規事業に挑戦したりする人(団体)をローカルベンチャーと呼び、その輩出・育成を目指しています。

2016年9月、岡山県西粟倉村とNPO法人ETIC.(東京都)の呼びかけに賛同した全国8つの自治体により発足し、その「広域連携によるローカルベンチャー推進事業」が内閣府の地方創生推進交付金に採択されました。

この事業の成果は、2016年度から2020年度(2021年3月)までの5年間で、参画自治体合計で、ローカルベンチャーによる売上規模の増加57億円、新規事業創出数274件、起業型・経営型人材の地域へのマッチング(就業紹介)400人にのぼります。

2021年度からは、さらなる深化・高度化を目指し、「自治体広域連携によるローカルベンチャー拡大推進事業」として、第2期の取り組みを始めました。現在6自治体が幹事自治体として参画しています。

## 1.2 ローカルベンチャー支援の取り組み

本事業におけるローカルベンチャーの起業・事業成長支援は、各自治体独自の取り組みと協議会全体としての取り組みの二層構造になっています（図）。

各自治体レベルでは、それぞれ民間の中間支援組織と連携し、地域によって異なる産業構造や気候風土に合わせた支援、さらに各事業者の規模・状況に適したきめ細かい支援を実施しています。

協議会レベルでは、本事業推進に必要な経営資源を豊かにしていくための共通プラットフォームの開発を行っています。また、第2期の取り組みにおいては、これまでの「0→1」の起業支援に加え、地域としての雇用創出や地域課題解決等を見据えて、新たな産業群を育てていくことを目指しています。



図1 ローカルベンチャー協議会と自治体の各推進事業の二層構造

### 1.3 このレポートについて

本レポートでは、参画自治体の1つである島根県雲南市が、ローカルベンチャー推進事業において、自治体独自の取り組みとして行っている起業家支援プログラム「Seedラボ」のコース（ゼミ）の1つとして、2021年に始まった「SATOYAMAツーリズム」のこれまでの実績・成果を示します。

さらに、「SATOYAMAツーリズム」を通してインバウンド観光客を増やすことで、雲南市民や雲南市の将来にどのような成果があらわれるのかをインパクトモデルとして示し、雲南市の可能性を可視化しました。

## 2. 雲南市について

### 2.1 雲南市の概要とこれまで

2004年11月1日、人口減少、少子高齢化、行政課題の多様化、財政の硬直化といった課題に対応するために、大東町・加茂町・木次町・三刀屋町・吉田村・掛合町の6町村が合併し、新たに「雲南市」が誕生しました。

雲南市は島根県の東部に位置し、南部は広島県に接しています。総面積は553.4km<sup>2</sup>で島根県の総面積の8.3%を占め、その大半が林野です。雲南市は、県庁所在地である松江市および出雲市に隣接し、両市とは通勤や通学、商圈など社会的及び経済的に大きなつながりがあります。

雲南市にはヤマタノオロチ伝説で知られる斐伊川が流れ、各地に神話や伝説、神楽などが伝承されており、加茂岩倉遺跡や神原神社古墳をはじめとした多くの遺跡や古墳が発掘されています。古くから斐伊川の支流周辺の低地では農耕が営まれ、山間地では「たたら製鉄」や炭焼きが盛んに行われてきました。また、山陰と山陽を結ぶ主要街道上に位置することから、陰陽を結ぶ交通の要衝として栄えてきました<sup>1</sup>。

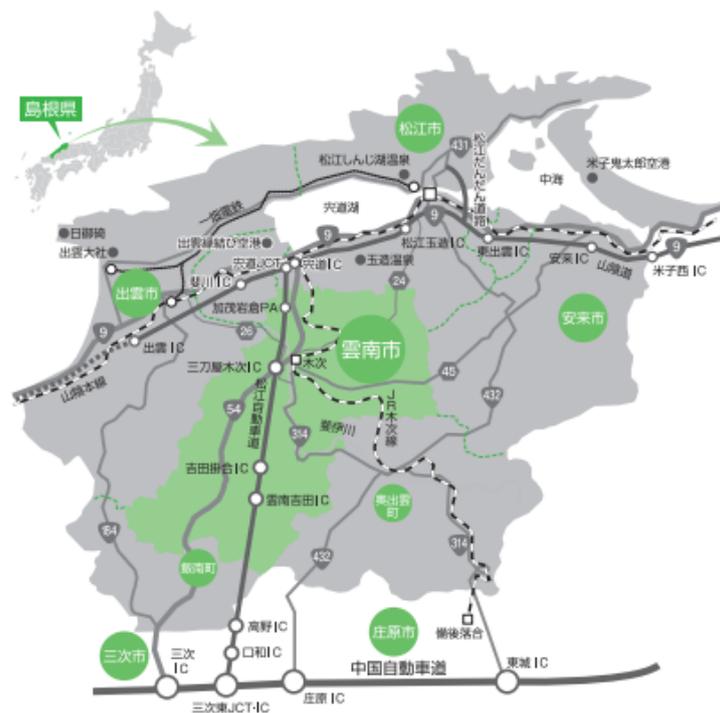


図2 雲南市の位置<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 第2次雲南市総合計画後期基本計画・第2期雲南市まち・ひと・しごと創生総合戦略  
<https://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/shiseijouhou/jouhoukoukai/sousei/sousei02.html>

<sup>2</sup> 同上

雲南市の特徴の1つに、6町村合併を機に誕生した「地域自主組織」があります。「地域自主組織」とは、合併により住民の声が行政に届きにくくなることや、地域間格差が生じることを懸念して生まれた、住民自らが主体となって地域づくりを行う組織です<sup>3</sup>。

雲南市は人口減少が進む中、持続可能なまちづくりに向け、若者の人口流出を抑制し、移住・交流人口の増加により、次世代の担い手を確保する必要があるとしています。2015年度に第2次雲南市総合計画を策定して以来、雲南市では「課題解決先進地」を目指し「人口の社会増」への挑戦をしています<sup>4</sup>。

具体的には、「地域自主組織」によって生まれたチャレンジの姿勢を継承するため、2011年に「幸雲南塾」という、本気で地域をつくる若者を育む次世代育成事業がスタートしました。

さらに、雲南市は2015年に地域自主組織の取り組みを「大人チャレンジ」、幸雲南塾をはじめとした若者の起業・地域づくり支援を「若者チャレンジ」、子どもたちの地域課題解決学習を「子どもチャレンジ」と名付け、住民がチャレンジできる環境を整えています<sup>5</sup>。このような背景の中で、この子ども・若者・大人チャレンジをより推進していくために、2016年にローカルベンチャー協議会に参画し、幸雲南塾への注力や、企業との連携を推進してきました。さらに、2019年4月には雲南市チャレンジ推進条例が施行されました。

---

<sup>3</sup> 雲南市のソーシャルチャレンジHP <https://unnan-social-challenge.jp/all>

<sup>4</sup> 1に同じ

<sup>5</sup> 3に同じ



図3 雲南市の子ども・若者・大人チャレンジ概要（図赤枠部）

雲南市は子ども・若者・大人世代のすべてにおいて社会課題解決を目指す人を応援しており、様々なチャレンジが進められています。

## 2.2 今後目指す姿

雲南市は現在、第3次雲南市総合計画策定に向けて基本構想素案を示しており、その中で、将来像（案）として10年後の目指す姿を「えすこな 雲南市」としています。「えすこ」は、雲南市の方言で「ちょうどよい状態」を意味します。雲南市には人と人、人と自然、世代と世代がえすこに（ちょうどよい状態で）つながる豊かさがあるとしています。

### 8. 導き出されたキーワード

【将来像】（10年後のめざす姿）  
**えすこに／豊かさ／地域（自治）**

【解説】  
えすこに：多様性を尊重し、自然や次の世代にとっても良い状態。  
豊かさ：先人から引き継いだ多くの恵みとともに、物心ともに満たされている暮らしがある状態。  
地域（自治）：暮らしの舞台である地域やコミュニティが元気な状態。

【基本理念】（将来像の実現に向けた心構え）  
**つながり／チャレンジ**

【解説】  
人と人とのつながり、人と自然とのつながり（食、エネルギー）、過去から現在へのつながり（神話、たたら文化）、現在から次の世代へのつながり（教育、サステナビリティ）、外とのつながり（人材選流）、つながっている安心感・などを大切にすると同時に、変えるべきものを勇気をもって変える挑戦（チャレンジ）を大切にする。

### 9. 基本構想の素案

**将来像（案）**  
10年後のめざす姿、つくりたいまちの姿

**えすこな 雲南市**

「えすこ」は、雲南市の方言で「ちょうどよい状態」のこと。  
核家族化、少子化、都市化の進展などにより、社会の孤立化・分断化が進む中、雲南市には人と人、人と自然、世代と世代がえすこにつながる豊かさがあります。今だけ、自分だけ、人間だけではなく、みんなにとっての「えすこ」な状態があふれるまちの実現を目指し、「えすこな 雲南市」を目指す将来像に掲げます。

図4 雲南市の将来像（案）（市基本構想素案）<sup>6</sup>

<sup>6</sup> 第3次雲南市総合計画基本構想素案資料

<https://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/shiseijouhou/jouhoukoukai/sougoukeikaku/files/townmeeting.pdf>

### 3. SATOYAMAツーリズムとは

#### 3.1 SATOYAMAツーリズム立ち上げの経緯

SATOYAMAツーリズムは、雲南市の概要にて示した「課題解決先進地」を目指すための「子ども・若者・大人チャレンジ」のうち、「若者チャレンジ」と特に関連があります。

若者チャレンジの始まりとなった「幸雲南塾」（2011～2021年）は、事業アイデアの言語化や収益事業の立ち上げをサポート（仲間とのつながりや先輩起業家等からのアドバイス等）する人材育成の取組みでした<sup>7</sup>。また幸雲南塾は、2016年からのローカルベンチャー推進事業における自治体独自の取組みとしても注力されてきました。

この幸雲南塾で誕生した「未来の創り手」が学びの触媒となり、ベンチャー同士が横でつながり、起業家・事業家が育ち合うラーニングコミュニティとして「Seedラボ」（2021年～）が始まりました。ローカルベンチャー推進の取組みとしてもSeedラボが幸雲南塾の後を継いだ形です。Seedラボは、起業家同士が地域内の資源を共有することで相乗効果を促すことや、起業家同士が高め合い、より早く成長すること等を目指す取組みです。そのため、分野を特定してゼミを立ち上げ、起業家が連携しやすくなる仕組みを設けています。

## Seedラボ（概要）

### 起業家・事業家が育ち合う土壌としてのラーニングコミュニティ

**対象：**過去の若者チャレンジプログラム参加者や地域おこし協力隊等を含む、雲南地域の課題解決や活性化を目的としたマイプランをもつ人

**目的：**先輩起業家等を軸とした学び合いのコミュニティをつくり、相互連携によって地域に変化を生み出していくチャレンジャー・クラスターを可視化・強化。事業家としての引き上げを重視。

**内容：**テーマごとに雲南の先輩起業家等をゼミ長（☆）として配置し、各テーマゼミの企画を担う。講師を招いた勉強会、マイプランへのアドバイス、フィールドワークなどを盛り込む。5月～12月まで各ゼミ6回程度開催し、全体会を1回（※1）、最終報告会を1回開催（※2）。

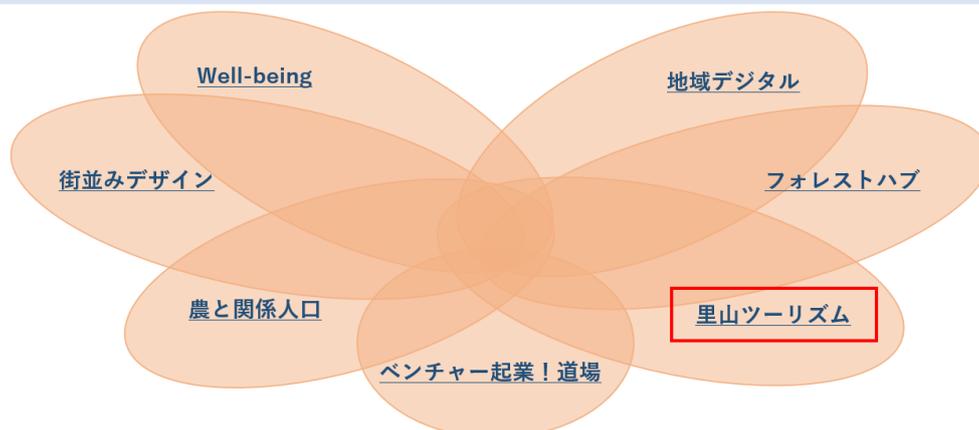


図5 Seedラボ概要及び2024年ゼミ一覧<sup>8</sup>

<sup>7</sup> CO-UNNANJYUKU HP <https://www.co-unnanjyuku.com/about>

<sup>8</sup> 特定非営利活動法人おっちラボ資料より

SATOYAMAツーリズムは、このSeedラボのゼミの1つとして2021年に立ち上げられました。その背景には、雲南市の重点テーマの1つ、「森林の利活用と観光」があります。

現状では、森林を活用・整備するための法律整備や森林保護に関する税金の創設も行われている一方で、従来の森の役割である木材の生産が、人口減少などにより難しくなっています。結果として、森の使い道が少なくなることによる収入の減少が起こり、山の整備が十分にできなくなっています。

森林資源を守るためには、林業による経済林の活用だけでは限界があり、森林を空間資源として捉えた新たなサービス・アクティビティの開発と運用によって、新たな経済を森林保全に回していくことを狙いとした構想をもとに、社会実験プロジェクトとして2021年にまず、Seedラボの1つとして「森あそびラボ」が立ち上がりました。その活動を通じ、どのように人の流れやお金の流れを作っていくことができるか、さまざまな実践を重ねるうち2023年に誕生したのがSATOYAMAツーリズムというテーマです。

観光は、日本政府としても成長産業の1つと位置付け注力している分野でもありますが、すそ野の広い産業でもあり、多方面への波及効果が期待されています。SATOYAMAツーリズムはインバウンド観光や観光入込客数の増加に向けた戦略的な取組みの重要性はもちろん、観光というツールを活用し、地域の知恵や宝を掘り起こし、市民一人ひとりのwell-beingにつなげていくことを目指しています。上記のような起業家のクラスター強化を目指すという背景のもと、後述する活動をしています。

### 3.2 SATOYAMAツーリズムが目指す姿

SATOYAMAツーリズムでは、「SATOYAMA Tourism Valley 雲南」を目標として掲げ、人と森が共生する世界の実現を目指しています。

その実現に向けて、森との共生を実現するためのコンテンツの設計や、外国人を含む観光客の受入体制の整備や多様な人を呼び込む企画、その体制づくりを進めています。

また、ツーリズムには様々な領域が関わるため、観光を切り口として活動することにより、上述のSeedラボの各ゼミに関わる地域の多様なベンチャーが協力しあい、ベンチャーを含めた地域全体が活性化されることも目指しています。



図6 雲南市SATOYAMAツーリズムのビジョン<sup>9</sup>

<sup>9</sup> SATOYAMAツーリズム協議会資料より

### 3.3 SATOYAMAツーリズムの取り組み

SATOYAMAツーリズムの活動は、前身である「森あそびラボ」も含めて2024年で4年目となりました。活動の初年度（2021年度）には森あそびラボとして対話の場、学びの場作りを開始しました。具体的には、全国で同じ思いを持つプレイヤー同士が語らう「森あそびBeyondミーティング」や、雲南市の山主・行政の方々と先進事例を学ぶ「50年後の森検討会」を設定する活動を実施しました。2年目（2022年度）は①地域の森あそび案件組成、②企業×地域の接点づくり、③お金と人の流れづくりをテーマとし、プレスト会議や現地視察を開催しました。

これらの活動を踏まえ、2023年度には「SATOYAMAツーリズム協議会※」を立ち上げています。ツーリズムを通して未来に向けた新しい自然共生の暮らしを日本の地域にインストールしていくための検討を進めています<sup>10</sup>。

※【参考】SATOYAMAツーリズム協議会とは<sup>11</sup>：SATOYAMAツーリズム協議会は、地域のプレイヤー発掘や学び合い、将来的には事業開発を目指すためのプラットフォームです。様々な自治体やSATOYAMAプレイヤー（自然と共生する暮らしの知恵を引き継ぎ実践する語り部、里山、森林、里海をフィールドとして持続可能な活動を目指し実践するプレイヤー等）が参画しています。SATOYAMAツーリズム協議会では、隔週で作戦会議と勉強会をオンラインで開催しています。

## SATOYAMAツーリズム協議会について

林業の衰退や山林の荒廃が叫ばれるなか、日本国土の2/3を占める森林を、材木の畑としての山だけではなく、「森林空間」としてマーケット（お金と人の流れ）をつくりたい。

### 2021年度

初年度は実験的に、①全国のプレイヤーの発掘：森あそびBeyondミーティング、②山主と行政と先進事例を学ぶ：50年後の森検討会、という2本立てで活動を開始。「林業の課題」ではなく「森あそび」を切り口にすることでさまざまなプレイヤーが楽しみながら関わられる場を設定。

①森あそびBeyondミーティング  
 10組のアジェンダオーナーが登壇し、のべ80名が参加したプレスト会議  
<https://moriyasobi-bm.peatix.com/?lang=ja>  
<https://peatix.com/event/3062074?lang=ja>

②50年後の森検討会  
 ・マウンテンバイク、トレイル整備と森林管理（トレイルカッター代表 名取 将氏）  
 ・森の多様な活用の可能性／森林環境贈与税の活用（日本フォレスターLLC代表 小森 嵐樹氏）  
 ・白馬岩岳リゾートの挑戦と成果（株式会社岩岳リゾート 代表取締役社長 和田 寛氏）

### 2022年度

2年目は①地域の森あそび案件組成、②企業×地域の接点づくり、③お金と人の流れづくりがテーマ。

①Beyondカンファレンス、ローカルリーダーズミーティング、雲南市環境会議への登壇  
 ②森あそびBeyondミーティング（プレスト会議）  
<https://moriyasobi-bm202209.peatix.com/?lang=ja>  
<https://moriyasobi-bm202211.peatix.com/?lang=ja>

③内閣府「関係人口創出・拡大のための対流促進事業（中間支援組織の提案型モデル事業）」を活用した地域別戦略会議（愛媛県久万高原町、岡山県西粟倉村、島根県雲南市、北海道厚真町にて開催）、先進地視察（白馬、郡上）、プロボノメンバーの巻き込み  
 ④観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」を活用した神話の里×神事（たたら製鉄・神楽）を通し、森林資源活用について考える-シン・森遊び環境循環型研修コンテンツ造成事業」として企業研修モニターツアー、ワークショッププログラム実施。

### 2023年度～

2年間の活動を通じ分かったことは、既にさまざまな実践が行われているということ。つまり、各地のプレイヤーの発掘、育成フェーズではないと理解。課題はむしろマーケティング。集客・誘客。そして資金調達。そこで…「SATOYAMAツーリズム協議会」というプラットフォーム機能を通して、地域のプレイヤー発掘や学び合い、将来的には事業開発を目指すことに。

**里山ツーリズム協議会を通して未来に向けた新しい自然共生の暮らしをツーリズムを通して日本の地域にインストールしていくための活動ができないか。**

図 7 SATOYAMAツーリズム協議会について<sup>12</sup>

<sup>10</sup> 9に同じ

<sup>11</sup> NPO法人ETIC. Beyonders HP <https://beyonders.etic.or.jp/projects/40>

<sup>12</sup> 9に同じ

そのほかにも、雲南市SATOYAMAツーリズムでは一人でも多くの方々に里山に触れてもらうべく、これまで複数のイベントを開催しています。例えば、森林の活用方法について学ぶエコツアー（2022年）や伐倒体験イベント（2023年）を開催しました。

## 雲南市内で実施した森あそび／SATOYAMAツアーの例

### 森あそびラボフィールドワーク

2022年7月  
市内の実践者を訪問し、ツアーコンテンツをしての可能性を探る。

内容：

- ・里山照らし隊：草刈り応援隊、炭蓄電池
- ・峯寺：地域史、みつばち目線の森づくり
- ・たなべたたら里：たたら製鉄の歴史

関連記事：

<https://localventures.jp/report/nExACL32>



④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

### 日本古来の森林活用と サーキュラーエコノミーを学ぶ

2022年11月  
たたらと神楽の知恵から新時代を創る力を  
紐解く企業研修モニターツアー

①神と人が溶け合う「出雲神楽」体感する、②餅と人が手を携えた産業を体験する、③森に活かされていた時間を思い出すという3部構成。出雲大社正式参拝後、出雲神楽の体験、たたら操業見学、ジビエ料理、八重滝等を訪問

関連記事：

<https://www.knt.co.jp/ec/2022/moriasobi/>  
<https://drive.media/posts/36145>



### 伐倒体験

※フォレストラボとの共同開催

2023年12月  
里山を“見る力”を高めるとともに、既存の林業の枠にとどまらないマネタイズにつながるツーリズムの可能性を探る

山林の役割、木の見立て方、林業の道具等のレクチャーの後、あわいの森にて実際に見立て～伐倒を体験。翌日はGPSを使い里山の暮らしの跡をマッピングしていく。



図8 雲南市内で実施したイベント例<sup>13</sup>

<sup>13</sup> 9に同じ

## 4. SATOYAMAツーリズムにおけるインパクトモデル

### インパクトモデル作成の背景・目的

本インパクトモデルは、ローカルベンチャー協議会が雲南市役所にヒアリングを行い、SATOYAMAツーリズムの推進が地域の経済・環境・教育・文化面等多様な側面に与えるであろうインパクトを整理・可視化したものです。

同時に、誰と、インパクトモデルのどの部分で協力し関係する人や地域を高めあうことができるかを探る共通言語になるものとしても作成しました。Seedラボの様々なゼミに関わる人やベンチャー、また雲南市内外の方と、今後の活動の検討や一緒に取り組める仲間を探すために活用することを目的としています。

### 本モデルで想定しているツーリズム

本モデルで想定しているツーリズムは、里山資源を活かしたインバウンドを仮定しています。なお、インバウンドは今回の検討において1つの切り口として置かれたものであり、他の形のツーリズムを排除する意図ではありません。

また、想定する観光客数の規模について、現地ヒアリングにて「雲南市にとっては多数の観光客よりも「ちょうどよい」規模感の観光客数が合っている」とする意見が複数聞かれました。そのため、観光客数については数を追わず、その分、日帰り・1泊でなく複数日にわたり、ゆったりと滞在いただくツーリズムを主に想定しました。加えて、観光客の国籍は限定していません。

雲南市SATOYAMAツーリズムにおけるインパクトモデル (図)

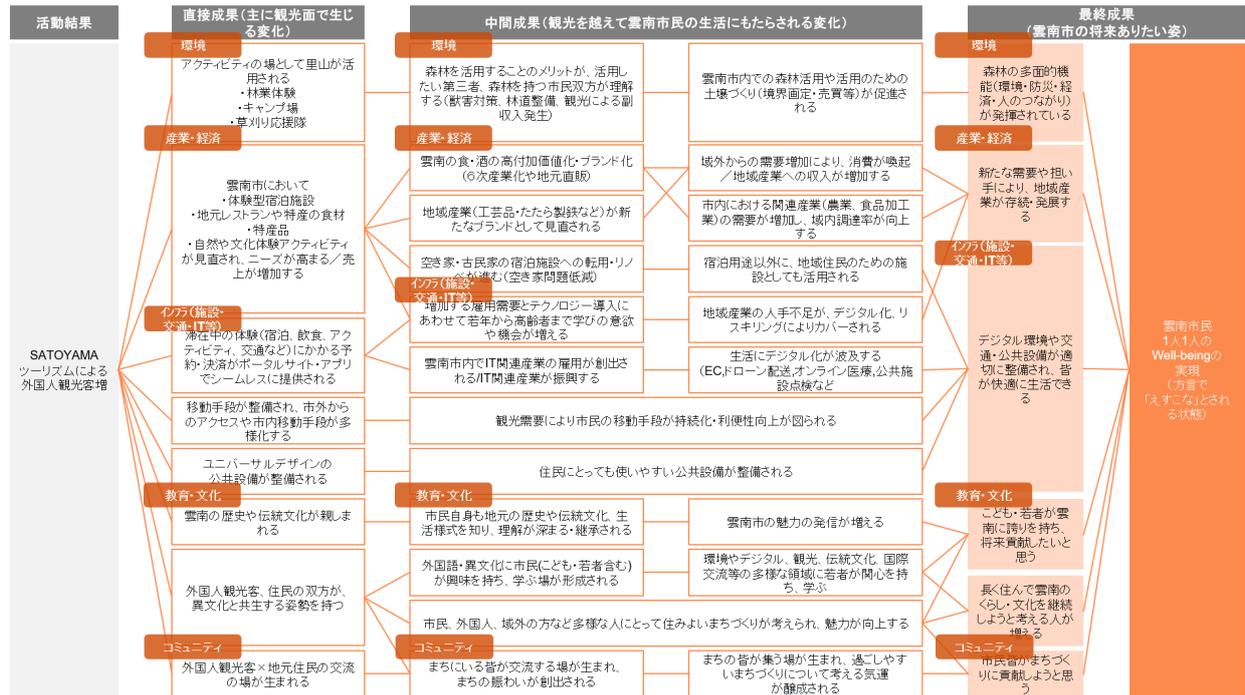


図9 インパクトモデル

本モデルの構成 (表頭の各項目の考え方)

表頭の項目については、左側から以下のとおり定義しています。

- ・活動結果：SATOYAMAツーリズムの活動によってもたらされた結果
- ・直接成果：外国人観光客ニーズによる、主に観光面での変化・効果
- ・中間成果：直接成果から波及して生じる、観光に限らない雲南市民の生活にとっての変化・効果
- ・最終成果：中間成果から更に波及して生じる雲南市民にとっての大きな変化・効果

## 雲南市SATOYAMAツーリズムにおけるインパクトモデル（詳細）

本インパクトモデルでは、SATOYAMAツーリズムによる外国人観光客増を通じてもたらされる影響を可視化し、環境、産業・経済、インフラ（施設・交通・IT等）、教育・文化、コミュニティの5つのカテゴリに区分しています。

以下、5つのカテゴリに沿って、観光面での変化に始まり、波及して雲南市に生じ得る変化の仮説について紹介します。なお、今回挙げた要素（例：教育・文化に係る直接成果「外国人観光客と住民の双方が、異文化と共生する姿勢を持つ」）は1つのカテゴリだけに影響を与えるものではなく、複数のカテゴリに跨って影響を与えるものであると認識しています。そうした各要素の関係の全体像は、「図9 インパクトモデル」にてご確認ください。

### 【1. 環境】

環境的な側面においては、SATOYAMAツーリズムが開催する森あそびやSATOYAMAツアー等のイベントを通じて里山がアクティビティの場として活用されることが想定されます。それらの活動を対外的に発信することにより、森林を活用することのメリットが森林活用を希望する第三者や森林を持つ市民に伝わり、結果的に雲南市内において森林活用や活用のための土壌づくり（境界画定・売買等）が促進されていくことが見込まれます。その結果、森林の多面的な機能（環境・防災・経済・人のつながり）が発揮されている状態を実現できます。

### 【2. 産業・経済】

SATOYAMAツーリズムによる外国人観光客が増加することで雲南市の各観光関連事業が見直され、ますます観光客によるニーズが高まり、売上の増加が見込まれます。観光関連事業とは、宿泊業、飲食店業、観光施設事業等の地域観光の振興に資する事業を指します。観光関連事業の見直しは、雲南市民の生活にも主に3つの影響をもたらします。

まず、雲南の食・酒の高付加価値化・ブランド化が進むことで域外からの需要が増加し、消費が喚起され、地域産業の収入が増加します。2つ目として、地域産業（工芸品・たたら製鉄など）が新ブランドとして見直されることで、市内における関連産業（農業、食品加工業）の需要が増加し、域内調達率が向上します。最後に、宿泊業見直しの一環で新規宿泊施設の設立だけでなく空き家・古民家の宿泊施設への転用を進めることで空き家問題が徐々に解消されることが期待できます。加えて、そのリノベーション施設が宿泊用途以外にも地域住民のための施設としても活用され、住民の生活の質が上がるかもしれません。

この3つの影響により、新たな需要や担い手の獲得を通じた地域産業の存続・発展が見込まれます。

### 【3. インフラ（施設・交通・IT等）】

インフラについては、観光客増加に伴い各種観光関連サービスの向上のために検討が進められることで主に3つの直接的成果が見込まれます。

- (1) 滞在中の体験（宿泊、飲食、アクティビティ、交通など）にかかる予約・決済がポータルサイト・アプリでシームレスに提供されること
- (2) 移動手段が整備され、市外からのアクセスや市内移動手段が多様化すること
- (3) ユニバーサルデザインの公共設備が整備されること

(1) のサイト・アプリのシームレス化により、雇用需要やテクノロジー導入にあわせて若年から高齢者まで学びの意欲や機会が増えることに加え、雲南市内でIT関連産業の雇用が創出されるでしょう。また、それにより地域産業の人手不足解消やデジタル化の進展が見込まれます。

(2) の移動手段の多様化により、雲南市民の移動手段も持続化され利便性向上が図られるようになります。

(3) のユニバーサルデザインを考慮した公共設備の整備により、外国人観光客だけでなく雲南市民にとっても使いやすい公共設備を整えることができます。

これらの変化が雲南市民の生活にもたらされることによって、デジタル環境や交通・公共設備が適切に整備され、皆が快適に生活できるまちを実現することができます。

### 【4. 教育・文化】

教育・文化の側面においては、主に2つの変化が生じると想定しています。

まず、ツーリズムを通じて観光客から雲南の歴史や伝統文化が親しまれるようになることで、雲南市民自身も地元の歴史や伝統文化、生活様式を知り、雲南市に根差した文化への理解が深まります。理解が深まり継承への意識が芽生えることで雲南市の魅力を発信する人が増加し、将来的にはその発信を見た子ども・若者が雲南市に誇りを持ち、将来貢献したいと思うようになることが見込まれます。

また、外国人観光客と住民の双方が、異文化と共生する姿勢を持つことで外国語や異文化に対して子ども・若者を含む雲南市民が興味を持ち、学ぶ場が形成されることも想定されます。学ぶ場が確保されたことで子どもや若者が環境やデジタル、観光、伝統文化、国際交流等の多様な領域に関心を持ち、彼ら／彼女らの目線で雲南市にどのようなアクションを起こすことができるのか考える人が増えることを想定しています。

## 【5. コミュニティ】

まず、SATOYAMAツーリズムのイベントを通じて外国人観光客と地元住民の交流の場が生まれます。外国人観光客と地元住民の交流の場をきっかけに、それ以外の場所でも交流機会を確保しようと試みる住民が現れるかもしれません。彼ら／彼女らがまた新たな交流の場をつくることで、まちの賑わいが創出されていきます。雲南市民が集う場が益々増えていくことで、過ごしやすいまちづくりについて考える気運が醸成されていき、市民全体のまちづくりへの貢献度が向上します。

これら5つのカテゴリに生じ得る変化は、最終的には雲南市民一人ひとりのWell-beingの実現（方言で「えすこな」とされる状態）に寄与すると想定しています。

### むすびに～雲南市からのコメント～

---

以上のようなインパクトモデルを踏まえ、今後、まずは地域内のコンテンツの洗い出しと、想定顧客に応じた複数のストーリーづくり、モニターツアーを通じたコンテンツの磨き上げ、そして各ツアーの付加価値を高めるガイド人材の育成を実施していきたいと思っています。

そのために、地域のステークホルダーとのネットワークを強化していく必要がありますが、本インパクトモデルに示されている変化への期待を共有することで、ネットワーク化が推進されることと思います。